2005年度

地域研修報告書

北海学園大学 経済学部

北海学園大学 経済学部長
小田　清

2005年度『地域研修報告書』の発行に当たって

地域経済学科に開設されている「地域研修Ⅰ・Ⅱ」は、「地域づくりの諸活動」を直接見聞・体験することによって、現実の生きた地域経済・社会を学習することにおかれています。すなわち、講義やゼミナール等で学んだ理論や知識をもとにしながら、地方自治体や民間企業、各種団体やNPOなどにおける様々な「地域づくり」「マチおこし」「国際交流」などの取り組みに触れることによって、その地域が抱える悩みや問題、あるいは良き事例を学ぶというものです。また、泊まり込みなどで地域住民との交流をさらに深めながら、地域づくりに寄せる住民の熱い思いを学び取ることも重視しています。

これまでの経済学のイメージは「理論=Desk Work」でしたが、近年では多様な学問分野を取り込んで展開されています。この「地域研修」もそのような広がりの一つで、成果の発表は履修者全員参加の下、ゼミ単位での「地域研修報告会」として行われています。その概要を『報告書』としてまとめたのが本書です。ご笑覧頂ければ幸いです。

ご協力頂いた地方自治体や各種団体の皆様に深く感謝申し上げます。

●目　次●

1 浅妻　裕 ゼミ ■研修地:登別市 …… 2
「環境保全型の観光地づくりに向けて」

2 池田　均 ゼミ ■研修地:室蘭市、登別市 …… 3
「地域活性化への模索」

3 伊藤淑子 ゼミ ■研修地:栗山町 …… 4
「まちという名の家族ー栗山町を訪れて」

4 伊藤淑子 ゼミ ■研修地:ニセコ町 …… 5
「ニセコ町のまちづくりに学ぶ」

5 太田原高昭 ゼミ ■研修地:滝川市、旭川市、富良野市 …… 6
「地域でがんばる人々を訪ねて」

6 奥田　仁 ゼミ ■研修地:余市町 …… 7
「地域の歴史と産業を訪ねて」

7 小田　清 ゼミ ■研修地:倶知安町 …… 8
「地域産業の発展と新しい地域活性化への動き」

8 川村雅則 ゼミ ■研修地:夕張市、札幌市 …… 9
「旧産炭地・夕張で地域経済を思い足元の札幌で女性労働を考える」

9 北倉公彦 ゼミ ■研修地:長沼町 …… 10
「グリーンツーリズムを学ぶ」

10 竹田正直 ゼミ ■研修地:石狩市 …… 11
「石狩市地域研修の成果」

11 西村宣彦 ゼミ ■研修地:清水町、新得町、帯広市、中札内村 …… 12
「十勝地方のナチュラル・チーズ産業の調査」

12 古林英一 ゼミ ■研修地:苫小牧市 …… 13
「サケ定置漁業の体験実習」

13 水野邦彦 ゼミ ■研修地:韓国 …… 14
「韓国社会を知る実地研修」

14 水野谷武志 ゼミ ■研修地:登別市 …… 15
「登別観光の実態調査」

15 山田誠治 ゼミ ■研修地:函館市 …… 16
「人と人のつながりを拡げる中で函館駅前の活性化を」

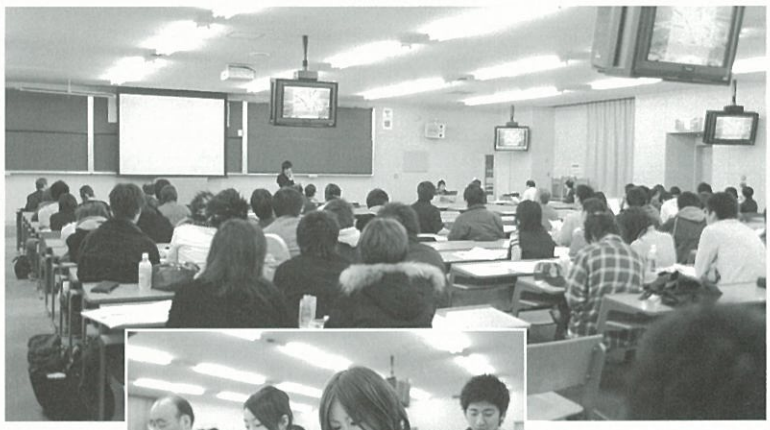
16 山田誠治 ゼミ ■研修地:金沢市、富山市 …… 17
「伝統と未来の融合を追い求める街ー金沢と富山」

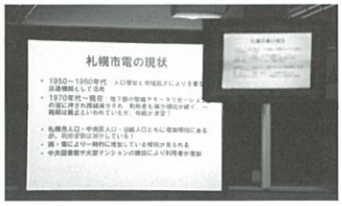
地域研修報告会

（2005年12月3日・10日）

「地域研修」は2004年度から始まり、今年度で2年目になります。昨年度は研修初年度ということもあり、石狩市や旭川市、夕張市、栗山町、倶知安町、西興部村など、札幌周辺自治体を中心としての地域調査が大半でした。しかし、本年度は昨年度の経験を踏まえ、より深めた「研修テーマ」を設定した結果、本州地域や海外地域にまで範囲が広がり、かつ本格的な地域実態調査を踏まえての地域研修も行われるようになりました。

その成果は「研修テーマ」に則してゼミ単位で蓄積され、また先輩から後輩へと継承され、将来的には一つのまとまった「研究報告書」として公表されることになるのではないかと秘かに期待しております。





その第一歩となる「地域研修報告会」は12月3日と10日（いずれも1・2講目）に実施されました。報告会参加ゼミ生は、事前にパワーポイントやOHPを使用しての報告練習を行ったようで、学会並みの本格的な報告も多数ありました。また、決められた時間を上手に使っての報告の難しさ、ギャラリーに自分の意志を正確に伝えることの大切さなど、これまでに経験したことのない貴重な時間を過ごしたようです。

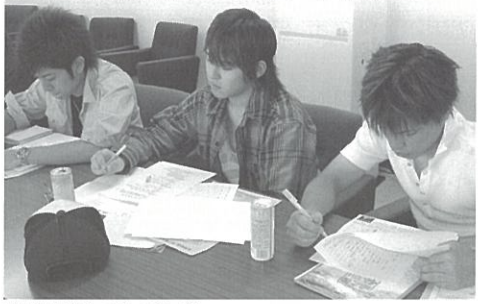
次年度はさらに報告時間と日数、質問時間を増やし、本年度以上に内容の濃い報告会を実施し、地域研修の成果を高めていきたいと考えています。各ゼミの次年度での益々の研鑽を期待しております。

1 浅妻　裕 ゼミ

■研修地：登別市　■参加学生19名
■研修期間：05年9月13日～15日、11月14日
■経済学科講師：浅妻　裕

今回、浅妻ゼミでは登別市を訪れた。学習テーマは、環境保全型の観光地づくりの現状と課題であったが、農産物などの地域資源の活用や観光振興の現状などについても学習することができた。訪問箇所は6箇所、調査日は4日間に及び、それ以外にも、電話で関連企業等への積極的な問い合わせを行うなど、学生にとっては調査漬けの日々であった。ハードではあったが、この過程で学生の成長を感じとることができた。多くの学生にこの科目を履修して欲しい。

環境保全型の観光地づくりに向けて



登別観光協会でのヒアリング

クリンクルセンターで施設の説明を受ける

学生報告

観光地登別の実態

地域経済学科2年　大西　剛
（駒大苫小牧高校出身）

「登別の温泉」といえば、北海道を代表する有名な観光地であるが、我々が宿泊したホテルに対するヒアリングやバックヤードの見学をして、いろいろな問題点があることを知った。まず、年々客数が減少傾向にあること。これには様々な要因があるが、石水亭支配人の山田さんは「街づくり」という点をその一つに挙げた。登別市には温泉のほかに「地獄谷」や「クマ牧場」などの有名な観光地がある。市はそういった観光地を売りにするのと同時に頼りすぎているところもあり、街づくりをおろそかにしてきた。それが客数の減少につながっている。

今後の登別観光の発展にとっての課題は、ホテルと街の「共生」である。ホテルがメインではなく、街の魅力を最大限に生かしながらホテルを選択してもらうということが重要になってくる。旅館側は囲い込む戦略から地域密着型への転換を図りつつ地域の魅力作りに尽力する必要性が高まっている。

また今回の中心的なテーマであった環境保全型の観光地づくりについては、個別の旅館レベルでは、無包装、ペーパーレス等の工夫を行っており、一定の成果はあるものの環境保全の観点から見た場合、その効果は非常に薄い。また経費節減策との境界が曖昧な状況と言える。今後、すでに温泉街全体で実施されている生ゴミの堆肥化事業など、組織的な取り組みを強めることで、登別をアピールできるのではないかとの感想をもった。

地域研修Ⅰを終えて

地域経済学科2年　浅田 祐介
（稚内高校出身）

我々浅妻ゼミは、登別の観光保全型の観光地づくりをメインに、観光振興の現状と課題等について調査・考察を行ってきました。夏期休暇中、秋期間の二回に渡り登別に訪れ、実際に施設を体験したり、旅館のバックヤード見学、 各施設でのヒアリング等の研修を行いました。訪問した施設は、夏期に札内高原館・観光協会・石水亭・マリンパークニクス、秋期には、市の廃棄物政策と農林水産政策について、詳しく教えてもらうことができました。企画や調査・考察の段階では、自分達の興味のある分野のものを選択できるため積極的に関わり、楽しみを持って学べました。また、詳しい調査・考察結果については、ゼミ内で発行した論文としてまとめることができました。さらに、ゼミ内の交流も深まり、普段できない体験を通じて自分自身成長できたと感じています。

2 池田　均ゼミ

■研修地:室蘭市、登別市　■参加学生26名
■研修期間:05年8月29日～30日
■地域経済学科教授:池田　均

ゼミ学習の延長線上に「現実の地域問題を具体的地域で学ぶ」ことを課題としている本ゼミでは、今年、室蘭市と登別市で地域研修を行なった。隣合せの両市がモノづくりと観光に特化し、それぞれ異なった産業構造と就業構造を形成してきた。それ故、今日、両地域はそれぞれに異なった地域問題の解決に迫られている。両地域がこれまでの歴史から何を学び、今後を展望しているのか。両地域での「講演」と「地域見学」によって学んだものと思う。

地域活性化への模索

新日鉄廃プラスチック再生工場

学生報告

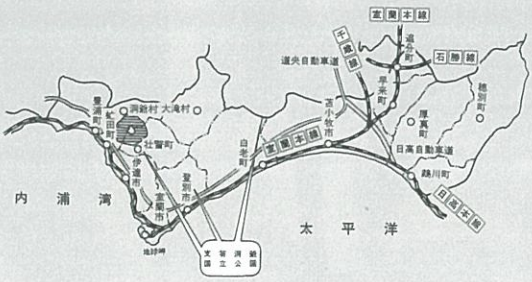
モノカルチャー的産業構造からの脱却による地域活性化

地域経済学科3年
澤田 正寛
（登別南高校出身）

地域研修（Ⅰ）は、工業の町室蘭市と温泉の町登別市で行いました。工業の町として広く知られる室蘭市ですが、現状では人口減少が著しく、主たる産業の衰退と共に人口減少が続いているのです。こうした状況下で室蘭市では、「ものづくりの町の推進」と「環境産業の町の推進」という二つの政策を掲げています。近年まではモノカルチャー産業化していた室蘭市ですが、他の産業とも関連させながらの発展を目指しています。

登別市は、全国的に有名な温泉地を有し、観光産業を中心とした「まちづくり」を行ってきましたが、近年は観光客の減少もあり、海外からの観光客の誘致や他の観光地との連携による地域活性化を目指すと共に、高齢化社会に対応した温泉療養による地域発展を模索しています。

この二つの地域に共通している点は、主産業は依然として変わらず、長引く不況過程で人口減少や所得減少といった問題を抱えていることです。今後は既存の主産業にだけ頼ることなく、地域内産業の多様化、または主産業を活かしつつ他産業との関連を図った地域づくりが必要と考えられます。



資源循環型社会をめざす室蘭市

地域経済学科3年
徳田沙弥佳
（札幌啓成高校出身）

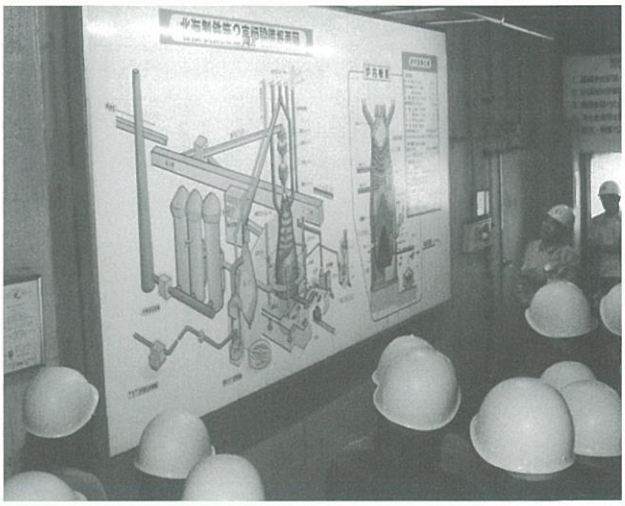
私たち池田ゼミナール（Ⅱ）は、地域研修として室蘭・登別を訪れ、そこで普段は入ることのできない場所を見学し、室蘭に関するお話を聞かせていただきました。

新日本製鉄株式会社の製鉄所を見学した際に、製鉄業とはまったく関係のないように思われるリサイクル業が行われているのを見て、私達は、室蘭がいち早く環境保全に取り組んでいるということを知ったのです。

新日本製鉄は、鉄鋼生産設備であるコークス炉を利用したコークス炉化学原料化法により、石炭の代わりにこれまでリサイクルできずにゴミとして焼却されてきた家庭用廃プラスチックを、製鉄原料であるコークス、プラスチック製品の原料となる油および発電用の水素系クリーンエネルギーとして利用していました。つまり、いらなくなったプラスチックをただ単に生まれ変わらせるだけではなく、そのリサイクルの過程で発生したすべてのものを再資源化していたのです。

私は見学を終えたとき、環境に良くないと思われがちなものも、努力によって環境に良いものへと改善されるのだと実感しました。

室蘭市には、今後もさらに色々な面で環境保全活動を推進していってほしいと思います。



新日鉄製鉄工場

3 伊藤淑子 ゼミⅠ

■研修地:栗山町　■参加学生12名
■研修期間:05年8月29日～30日
■地域経済学科教授:伊藤 淑子

ゼミナール1は、栗山町で地域研修を行いました。栗山町を研修先として選択した理由は、学生たちに、従来の「役所仕事」という概念にチャレンジしている人たちと出会ってほしいという願いからです。栗山町は、地域通貨「クリン」で有名な町ですが、その以前も以降も、「福祉のまちづくり」をはじめとし、斬新な独自事業が続けられています。そんなまちづくりのエネルギーを、それぞれが、肌で感じ取ったのではないかと思っています。

まちという名の家族－栗山町を訪れて

吉田参事が熱く語る「栗山町のまちづくり」

学生報告

ファーブルの森で

こんな研修でした

地域経済学科2年
久保田光彦
（小樽桜陽高校出身）

私たち伊藤ゼミは8月29日～30日にかけて、高原ゼミと合同で栗山町に研修に行ってきました。ここで簡単にですが、私たちが研修してきた内容を紹介したいと思います。まず29日の朝に札幌を出発し、10時頃に栗山町に着き、カルチャープラザという所で中心街の活性化事業についての話を聞きました。その後に駅前通りを視察し、昼食をとり、午後からは役場庁舎で吉田さんという方に栗山町の現状についていろいろ話を聞き、工業団地・「木の城たいせつ」の施設・町内にある「栗の樹ファーム」という施設をそれぞれ見学してきました。30日にもう一度役場庁舎に行き、今度は出南さんという方に栗山町が行っているまちづくりについての話をしていただきました。そして町内での地域づくりの現場（ファーブルの森など）の視察を行いました。だいたいこんな流れで研修してきたわけなのですが、この研修から帰ってきた後に自分の住んでいる市町村について考えたり、栗山町と比べてみたり…など色々考えた人が自分を含め結構いたようで、とても楽しく充実した研修でした。

印象に残ったこと

地域経済学科2年 東所直人
（札幌開成高校出身）

栗山町商店街は電線地中化を行っていました。道外では、京都や群馬で実施されているのは知っていましたが、栗山町でも実施されていたとは、思いもよりませんでした。歩道に電柱が無いだけで、景観が広がるだけでなく歩きやすくなり、自転車と歩行者の接触事故も減るでしょう。それに加え、車椅子の方や、視力障がいのある方も安心して通行する事が出来るのではないでしょうか。このような多くの町民の視点に立ったまちづくりには、他の市町村が学ぶべきことも多くあると感じました。

次に、栗山町に拠点を置く木の城たいせつ本社ですが、平成16年に小泉首相が訪問されました。これは木の城たいせつが日本有数の企業と認められたことであり、首相は同社の「もったいない精神」を絶賛し、「木の城たいせつは、世界に誇れる企業だ」とおっしゃっていました。

北海道の家は北海道の木で作るという姿勢の背景には「百年もつ家」というコンセプトがあり、説明をしてくださった北海学園大学の卒業生の方のお話しから、木の城たいせつが人だけでなく、環境に配慮した優良企業であると感じました。

栗山町の皆さまには、お忙しい中、私たち学生に貴重な体験をさせてくださったこと、そして丁寧で真心のこもった応対をしていただいたことに感謝いたします。

ホテルの前でやや不揃いのポーズ

4 伊藤淑子 ゼミⅡ

■研修地:ニセコ町　■参加学生8名
■研修期間:05年8月24日～25日
■地域経済学科教授:伊藤 淑子

ゼミナール2の研修先として、昨年の栗山町に続いて、今年はニセコ町を選びました。いずれも、先進的なまちづくりのために、全国から見学者が訪れている地域です。町総務課参事の方、また2日間にわたってお世話になった「ニセコリゾート観光協会」の方たちのお話から、全国から注目されるようになるまでの努力の蓄積、その間に直面した課題をどのように解決してきたのか、などといったことについて、ありありと伺うことができた、有意義な研修でした。

ニセコ町のまちづくりに学ぶ

研修を終えてこれから遊ぶぞ!

学生報告

ちょっと一休み

観光協会での研修

こんな研修でした

地域経済学科3年 梅野浩介
(小樽桜陽高校出身)

今回の地域研修で、伊藤ゼミは8月24、25日の2日間でニセコ町に行ってきました。ニセコ町は、全国の町の中でも独自のまちづくりを行っていることで注目され続けています。そうしたニセコ町で、実際にどのようなことが行われているのか、ということを研修してきました。役場では、「ニセコ町まちづくり基本条例」について、話を伺いました。また、全国で始めて株式会社化したというニセコリゾート観光協会では、観光協会の具体的な事業、綺羅街道を中心とした中心街の整備について、さらに観光、環境、農業のまちづくりなどの話も聞かせてもらいました。また、綺羅街道を実際に歩くなどまちづくりの様子を間近で感じたり、ラフティングをしたりしてニセコ町の観光を体感してきました。このようにニセコ町を研修することによって、ニセコ町の素晴らしさを存分に味わうことができました。その背景には、町長をはじめとする役場の人たちの斬新なアイデアや努力、町民の人たちとの連携が欠かせないものとなっていました。今回の研修で、まちづくりの根本を垣間見ることができ、満足いくものとなりました。

ニセコリゾート観光協会のこと

地域経済学科3年
国井利江子
(北海道大麻高校出身)

今回地域研修で、私たちはニセコ町を訪れました。このニセコ町には全国で初めて株式会社化した町の観光協会があります。今回の研修も「ニセコリゾート観光協会」の方々に大変お世話になりました。

今までの観光協会では、責任の所在が不明瞭であることや、財源を町に依存しているため、町の動向に左右されてしまい幅広い事業の展開が難しいことなどの多くの問題を抱えていたため、それらを解決するために株式会社化に乗り出しました。『会社が儲かることで地域が儲かる』いわゆる地域循環型の会社を目指し、様々な試みをなさっていました。

ニセコの観光協会は新しい観光協会のあり方として注目され、全国からの視察も多く訪れています。今後の課題としてはさらに地域振興による利益を上げ、様々なコミュニケーションをとっていくことがあげられています。

しかし、行政側から見ても観光協会から見てもメリットの大きいこの事業は今後ますます成長していくであろうと思います。産業振興のために商工・観光・農業の連携を図り、地域をコーディネートする観光協会の存在はこれからのまちづくり、地域発展に欠かせない存在となると思いました。

羊蹄山を見晴らす町の運動公園

道の駅のにぎわい

町には全国から視察が

5 太田原 高昭 ゼミ

■研修地:滝川市、旭川市、富良野市　■参加学生12名
■研修期間:05年8月22日～24日
■地域経済学科教授:太田原 高昭

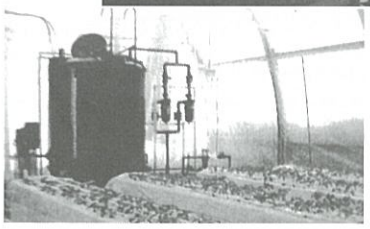
自家用車3台を連ねての2泊3日の旅でした。滝川市の農業機械メーカー、旭川市の旭山動物園、美瑛、富良野の観光地など肩のこらない見学旅行で学生は大喜び。宿泊も人里離れた山小屋の自炊生活で、買い物から自分たちでやりました。大自然の中で若いエネルギーを爆発させることでその後のゼミ運営にも大変よい影響がありました。地域でがんばる人々と触れあう経験は、地域経済学科での学習の基本であることを再確認しました。

地域でがんばる人々を訪ねて

富良野のお花畑

学生報告

旭山動物園にて



オオバのミスト栽培

生の情報を得る貴重な機会

地域経済学科3年 水野靖准
（滝川高校出身）

今年8月に行われた地域研修において、私たち太田原ゼミは最初の見学地として、北海道滝川市にある農業機械製造業サークル鉄工が行っているミスト栽培を見学しました。

サークル鉄工では滝川市江部乙町にある旧江部乙中学校跡地を、地域再生計画を用いて無償で利用し、ビニールハウスを建ててオオバの栽培を行っています。このオオバ栽培はミスト農法という特殊な技法が用いられています。私たちはオオバ栽培の行われているビニールハウスの内部を直に見学し、ミスト農法のやり方や設備などを見学したり、栽培されているオオバを食べてみたりしました。その後、サークル鉄工の方から、オオバ栽培に関する説明や現在の課題、今後の見通し等を聞き、見学を終えました。

この地域研修は、私たちが本や講義などで得ているいわば「伝え聞いた情報」ではなく、実際にその場所に赴き見学したり関係者の方々から話を聞いたりして、普段の生活ではなかなか得ることの出来ない「生の情報」を得ることが可能な貴重な機会を提供するものと言えます。机の上の学習だけでなく、こうした体験型の学習を取り入れていくことは画期的で重要なことだと思います。

地域再生の努力に学ぶ

地域経済学科2年
奥野満希子
（札幌開成高校出身）

今回は旭川を中心に、富良野地方などに地域研修に行きました。研修では、今後地域再生に期待が出来る農法や地域活性化に大きな影響を与えた場所を見学し、自然愛護等をしている方の話を聞きました。普段出来ない体験もあり、貴重な時間を過ごすことが出来たと思います。

研修で特に印象に残っている所は、旭山動物園でした。一般的な動物をただオリに入れる展示方法ではなく、動物本来の生態を生かした展示方法です。旭山動物園の「集客より、人を惹き付けるには一方の視点だけではなく、別の視点から見つめなおす」姿勢が成功につながるきっかけになると感じました。最近は、全国的に入場者が減少傾向にある動物園等の施設は、この状況を抜け出すために工夫する所が多くなったと思います。旭山動物園は、工夫すること、命の大切さを人々に教え、動物の本来の生きる様を訴え、今後も更なる発展をして欲しいです。

今回見学したところの共通点は、自ら地域再生のために工夫をし、共存共栄の仕組みのあり方を考え、活動しているというところが多かったように感じられました。今後更にどのような街づくりをしていくか興味深い地域で、注目していきたいと思います。

美瑛の丘にて

6 奥田　仁 ゼミ

■研修地：余市町　■参加学生8名
■研修期間：05年8月8日～10日
■地域経済学科教授：奥田　仁

奥田ゼミでは昨年は下川町という山村を訪問したが、今年は札幌・小樽に近く北海道でも比較的早くから開けた海辺の余市町で2泊3日の合宿を行った。今年のねらいは町形成の歴史とともに、余市町に特徴的な園芸農業の調査であったが、ちょうど農繁期に重なり農家は4軒しか訪問できなかった。とはいえ、町企画政策課の盛さん、滝上さんらからのレクチャーをいただくとともに、卸売市場、小樽ワイン、水産博物館、運上屋、福原漁場等々を見学し有意義な研修とすることができた

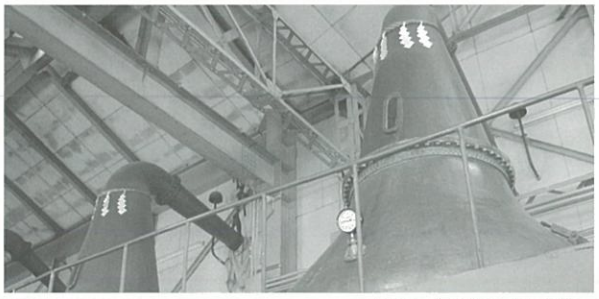
地域の歴史と産業を訪ねて

町役場　盛さん、滝上さんと一緒に

学生報告

水産博物館で

にしん建網の説明（同上）　北前船模型（同上）



「アランビック」ニッカウイスキー

恵まれた自然 ―新規就農者の夢と悩み

地域経済学科2年 奥山晃亘
（旭川商業高校出身）

今回の地域研修で奥田ゼミは、余市町で歴史や産業について調査した。余市町の歴史は、山を切り開いて造った道路ができるまで、川は挟んだ東西で分裂しており、東西それぞれが発展していた。その当時は漁業が中心産業で、漁業を行っていた西部は豊かで、町の中心であった。しかし、ニシンの漁獲量が減少していくと、中心産業は明治12年に初めて結実させたリンゴなどの果樹・農業へと変化した。その後、東部に鉄道が通り、町の中心は東部へと移った。

地域研修では現在の中心産業である農業の調査を行うため、新規就農者と既存農業者の2種類の農家を訪問し話を聞いた。2つの農家には年齢差や技術・経験の差はあったが、新規就農者の増加は後継者不足に悩む余市町では欠かすことのできない存在であった。しかし、新規就農者と既存農業者の間には技術・経験の情報交換などの交流が少なく、経験のない状態で農業を始めた新規就農者が困難に直面しているという話を聞いた。また、現在の余市町の産業には中心となる産物がないと、2つの農家が共通して考えていた。海と山・気候に恵まれている余市町では、その恵まれすぎた環境のため、産業が多様化し、逆に決定打が不足してしまうという問題があることがわかった。

地図を前に町の現状を聞く

7 小田　清 ゼミ

■研修地：倶知安町　■参加学生19名
■研修期間：05年8月22日～24日
■地域経済学科教授：小田　清

地域産業の発展と新しい地域活性化への動き

今回の研修はゼミⅠ・Ⅱと合同で「地域産業の発展と新しい活性化への動き」をテーマに、倶知安町で実施した。倶知安町は合併によって、羊蹄山麓の中心地として、さらなる発展を図ろうとしたが実現せず、新たな発展方向として基幹産業の農業を中心に、外国人指導者・観光客の増大によって、通年型の新しい観光地づくりに活路を見いだしつつある。今回の研修では、実体験を含めて「農業・観光」を学ぶことができたと思う。

ペンション前にて

学生報告

役場にて研修

芋選別場

地域研修Ⅱ
良く学びよく遊ぶ

地域経済学科3年 安部　光
（北海高校出身）

今年の研修は昨年同様、倶知安町で行いました。研修の最初は町の歴史や自然を知るために郷土博物館「風土館」で行いました。次いで役場企画振興課で倶知安町が現在直面している問題やこれからの将来像、農業についてのお話を伺いました。

倶知安町は町面積の約17%が田畑で占められ、農業が盛んな町です。「倶知安じゃが」と呼ばれるブランドのジャガイモが全国的に有名です。本州方面へ多く出荷しているので、道内より本州で知名度が高いそうです。倶知安町では、農業が今後とも地域の社会・経済を支える基幹産業と考えています。そのためには、地域の特性を生かしながら、品質の向上、生産コストの低減、また優れた後継者の育成、販路拡大を進めることが重要だとしています。

今は機械ですが、昔ながらの腰が痛くなるクワでの芋掘りも実際に体験しました。また、見学したジャガイモの選別場はとても立派で、ほぼ1年中出荷できるようにジャガイモを保存しておく大きな倉庫もありました。その倉庫は品質を落とさないように保冷システムが完備し、とても工夫されたものでした。なかなか触れ合うことの出来ない農業現場との出会いは、農業の重要性を教えてくれました。

わがゼミは、伝統的に「良く学び良く遊び」を重んじていますが、今回の研修では、机の勉強からは学べない「実体験による学習」として多くを学びとても有意義なものでした。

地域研修Ⅰ
実体験のすばらしさ

地域経済学科2年 片岡　健
（紋別北高校出身）

私達は、札幌市内から車で約2時間、「えぞ富士」と呼ばれる羊蹄山の麓に位置する、農業が盛んな倶知安町で研修を行いました。羊蹄山の麓に広がる広大な畑では、全国でも有名な「ようていじゃが」が栽培されています。観光面においても、隣のニセコ町と共に、夏はキャンプとラフティング、冬ではニセコグラン・ヒラフスキー場でのスキーやスノーボードと、年間を通じて自然と触れ合うことのできる道内随一の行楽地として、観光客からの根強い人気を得ています。

倶知安町では、郷土博物館「風土館」の見学、役場企画振興課による講話、農家での芋掘り体験、ジャガイモ選果・集荷場の見学、ラフティング実践と、町の特色ある農業や観光を実際に見て聞いて体験することができました。特に興味深かったのは、年々増加している外国人観光客（特にオーストラリア人）の増加についてのお話でした。2000年では外国人観光客数が849人（宿泊延べ数3,786人）であったが、04年には5,783人（同55,320人）と急激な伸びを見せていることでした。この外国人観光客のもたらす“好景気”を柱とし、どう地域活性化につなげていく（「ブーム」で終わらせないための施策等）のかの、町の考えを学ぶことができ、大変有意義な研修でした。ラフティングも天候に恵まれ楽しかったです。

芋掘り体験

8 川村雅則 ゼミ

■研修地:夕張市、札幌市　■参加学生16名(夕張)、1名(札幌)
■研修期間:05年8月29日～31日(夕張)、9月上旬～12月上旬(札幌)
■経済学科講師:川村 雅則

旧産炭地・夕張で地域経済を思い 足元の札幌で女性労働を考える

①夕張調査:人口流出が激しく企業誘致も困難な旧産炭地という地域では、そもそも雇用の機会が著しく少なく、若者に限ってはフリーターになることさえできないという深刻な状況が明らかになった。②札幌のパート労働者調査:雇用形態の「多様化」という喧伝のもとで拡大しているパートの労働条件・処遇は、正規雇用に比べると低い水準にあり、その改善が必要であること、また家庭内では、性別役割分業の考えも背景にあってか、家事の負担が女性に偏っているという結果が示された。

木材製作所にて工程の説明を受ける

学生報告

精密機械工場の見学

高校生の雇用問題を考える

フリーターにもなれない!?

地域経済学科2年 片岡翔人
(札幌北陵高校出身)

石炭産業の消滅による人口の減少・過疎化、高齢者の増加などの問題を抱える夕張市を訪ね、若年層の雇用の実態などについて関係者から話を聞いたり、工場見学を行った。夕張高校で聞いたのは、就職に関して生徒達の持つ強い地元志向だった。背景には少子化、保護者の心理、生徒達の生活感の変化などがある。就職・雇用の問題は深刻で、都市型フリーターは存在しない。彼らにはコンビニなどの働く場さえなく、メロン栽培などの季節労働ぐらいがあるのみだ。

高卒向けの求人に関する仕事内容も変化した。将来的なキャリア形成が望めない契約社員や、本州への派遣社員などが増加傾向にある。進学に関しては、実学(資格直結)型希望が増加している。だが、家計が厳しく学資金準備が非常に困難な世帯が少なくない点は見逃せない。

市役所では、石炭産業の消滅による人口上の変化もさることながら、夕張市の財政問題、すなわち、70%を超えると危険とされる経済収支比率は、なんと126%に及ぶことが示された。地理的問題、借金の問題から他の自治体との合併は厳しいとのことである。夕張市は対策として地域振興策を活発に進め、企業誘致、観光開発、農業、商業などで地域の活性化をめざしている。

女性の働く現実を考えてみました

地域経済学科3年 萩浦千尋
(札幌北高校出身)

現在わが国では非正規雇用が増大している。パートタイム労働者(以下、パート)の比率は雇用者全体の2割を占め、女性に限ると全体の4割にも及ぶ(総務省『就業構造基本調査』より)。そこで、労働組合の協力で、パートの活用が進んでいる大型小売店で働く女性パートを対象に、彼女たちの労働条件や処遇の実態、家庭内の家事の負担などを中心に調べた。調査方法は、労組役員への聞き取りとパートへのアンケートである。

両調査の結果を総合すると、従業員の雇用形態は8割がパートで、店側はその比率をさらに増加させる予定であるという。パートの1日の労働時間は4時間のウェイトが高い。また賃金は低く、パート全体の2割弱の時給は、最賃水準と同額である(ただし労組側はそれより10円以上高くすることをめざしているという)。求職者の少ない地域や特定の仕事に限ると、パートであっても賃金水準はわずかながら高い。とはいえ、パート側の全体的な意見としては、賃金水準をもっと引き上げてほしいという内容が多かった。最後に家事負担についてみると、大半が既婚者で子どものいる彼女たちは、家事や育児もやらなくてはならないという立場にあり、パートとして働くためには家族の協力も必要だという意見も多かった。

いざ行かん。次なる現場へ。

9 北倉 公彦 ゼミ

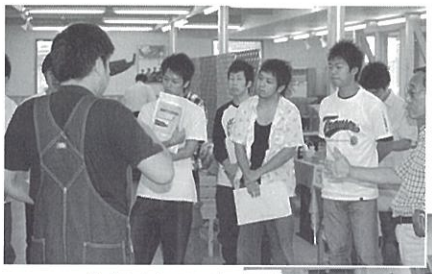
■研修地:長沼町　■参加学生12名
■研修期間:05年9月12日～13日
■地域経済学科教授:北倉 公彦

昨年に引き続き長沼町で、構造改革特区制度を活用して振興を図っている「グリーンツーリズム」をテーマに、Ⅰ・Ⅱ合同の地域研修を行った。学生は、その取り組み事例とともに、他の市町村とは異なる役場職員の困難を可能にする姿勢を学んでくれたものと思う。

グリーンツーリズムを学ぶ

笠山農政課長からレクチャーを受ける

学生報告



農産物直売所を見学

ながぬま温泉で

長沼での地域研修

地域経済学科3年
荒木智行・野本龍則
（苫小牧南高校出身）

長沼でのスケジュール

1日目は、笠山農政課長からグリーンツーリズムへの取組みについての説明の後、「米の館」見学、パークゴルフ体験。夜は役場の皆さんとジンギスカンで交流会。

2日目は、長沼町長を表敬訪問し、仲野りんご園と修学旅行生受入れ農家訪問。道の駅「マオイの丘公園」で昼食、解散。

長沼町が実施しているグリーンツーリズム事業は都市部の修学旅行生を農家に受け入れたり、札幌近郊の小中学生に農業を体験させ、農業に関心を持ってもらおうというもの。今年、初めて静岡県浜松市の中学生を受け入れた。

修学旅行生受入れの問題点

①1世帯当たり受入れ生徒数が3～4人であるため、農家によって生徒の体験に差が生じてしまう。
②受け入れた子供によって、男女差、食欲や性格に差があり、農家の負担額に差が出る。
③食費などの経費を差し引くと、ほとんど残らない。
④普通の民家では衛生管理上、食事を提供できないので、生徒が料理を手伝う形で実施している。

受け入れた柳原さんの声

中学生とコミュニケーションをとるのが難しかったが、学校で問題がある子でも素直で嬉しかった。基礎的な農作業だけだったが、真剣に取り組んでくれた。

長沼ジンギスカン

地域経済学科2年 市川奈央子
（函館東高校出身）

ゼミ合宿では「長沼ジンギスカン」の話がとくに印象的であった。「長沼ジンギスカン」というからには、長沼には羊がたくさんいるものと想像していたが、羊の姿はどこにも見られず、不思議に思った。

その謎は、役場の方々と夕食にジンギスカンを食べたときに解けた。昔は羊毛をとるために多くの農家で羊を飼っていたが、その肉はクセが強すぎたため家庭ごとに味付けして食べていた。売り出そうとした頃には羊がいなくなっていたので豪州産羊肉を味付けして売り出したのだそうである。長沼に羊がいないのも当たり前である。

長沼には味付けの違うジンギスカンが3種類あり、食べ比べることができた。最近は美容やダイエットに効果があると、東京の若い女性にも人気が出てきている。

2日目は、仲野リンゴ園を訪ねたが、もぎたてのリンゴの味と、仲野さんのリンゴやグリーンツーリズムに対する思い入れが印象的であった。また、浜松市の中学の修学旅行生を受け入れた柳原さん宅で、話を聞くことができた。

地域研修を通じて農業に関心をもつことができ、来年は、農家に宿泊してグリーンツーリズムを深く学びたい。

10 竹田 正直 ゼミ

■研修地:石狩市　■参加学生17名
■研修期間:05年8月5日～6日
■地域経済学科教授:竹田 正直

研修では、田岡石狩市長の講演と質疑によって、石狩市における地域社会経済の発展、とくに市民参加の行政、浜益村、厚田村の合併後の課題、サハリンの石油ガス開発とその輸出港建設関連で80億円の受注が石狩新港で開始されたことなどを学んだ。ホクレンの工場では、高度のオートメーション生産や衛生重視を学び、アイワードでは、顧客重視と感動、男女平等・障害者対等を実感した。奉仕活動や歴史学習を、また、留学生交流とゼミ学生同士の懇親と遊びを楽しんだ。

石狩市地域研修の成果

夕食後の楽しい交流会

学生報告

地域研修Ⅰ・Ⅱ終了報告

地域経済学科3年 桐島　梓
（別海高校出身）

私たち竹田ゼミは8月5日、6日に石狩市を訪れ、地域研修を行いました。参加者は2～4年生のゼミ生に加え、大学院生、北海道大学大学院で学んでいるサハリンからのロシア人ビクトリアさんでした。そのため、石狩市の社会経済を学ぶと共に国際交流を図ることができるものとなりました。

1日目は宿泊先である「石狩温泉番屋の湯」に到着後、石狩浜でごみ拾いボランティアを行い、その後に石狩市長の田岡克介氏の講演を聞きました。今年は主に石狩市・厚田村・浜益村の合併についてのお話でした。この合併を10月1日に控え、ご多忙の中、私たちのために時間を割いていただいたことに感謝をし、この機会に得ることができたものを今後に活かしていきたいと思います。その後の夕食や交流会では、石狩市在住のロシア人の方も参加し、より楽しい時間を過ごすことができました。また、主にこの時間を通して参加者同士がより仲良くなることができたと思います。

2日目はまず「いしかり砂丘の風資料館」に行き、石狩市にある遺跡から発掘された化石や昔使われていた道具などの展示物を見学しました。ここには触ることのできる展示物もあり、視覚・触覚で学ぶことのできる貴重な資料館でした。その後、2社の企業見学に行きました。ホクレンパールライスセンターではお米の製品化過程を見ることができました。自動連続分析システムやオートサンプリングシステムなどを駆使し、徹底した品質管理のもとで製造されていくからこそ、私たち消費者に安全でおいしいお米が届くということを実感しました。アイワードの石狩工場では印刷や製本など、本ができていく過程を見ることができました。工場見学の後には社員の方から会社の説明をしていただきました。また質疑応答の時間を設けていただいたことから、実体験をもとにしたお話も聞くことができ、より多くのことを具体的に学ぶことができました。「お客様の信頼を守る」というプロ意識をとても強く持っている素晴らしい会社だと感じました。

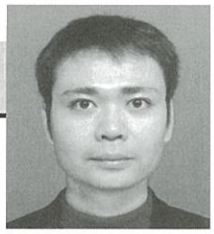
今回の地域研修を通して、市役所や企業など業種を問うことなく、現状に満足せずに新たな取組みをしていくということの大切さや難しさを学ぶことができました。また私たちが積極的に質疑を行い、より意欲的に学習できたことや参加者との親睦を深めることができたことも今回得ることのできたものの一つだと思います。また、今回の地域研修は昨年以上に有意義なものにすることができたように感じていますが、それも昨年の経験とこれまでの知識の蓄積、そして何よりも協力していただいた方々や引率していただいた竹田先生のおかげだと思います。これからも竹田ゼミで素晴らしい地域研修を体験できるよう、後輩達には頑張っていってほしいと思います。

大広間での朝食

2年生と留学生

石狩に住むロシア人のお母さんと参加したエリカちゃん

11 西村宣彦 ゼミ



■研修地:清水町、新得町、帯広市、中札内村　■参加学生9名
■研修期間:2005年8月17日～19日
■地域経済学科講師:西村 宣彦

今年の研修テーマは、「地域ブランド形成を通じた地域活性化～十勝ブランドを素材に」。十勝ブランドの第1弾となったナチュラル・チーズの生産者や行政関係者からお話を伺った。訪問地は清水～新得～帯広～中札内と広域に分散し、非常にハードなスケジュールであったが、地域ブランド形成の意義や課題を多面的に見ることができたのではないだろうか。多くの学生にとって、北海道の産する素晴らしい食材を、初めて食する機会となったのも、価値あることであったと思う。

十勝地方の ナチュラル・チーズ産業の調査

とかち財団にてレクチャーを受ける

学生報告

ランランファーム（清水町）にて山羊舎を見学
共働学舎新得農場にてチーズを試食

ナチュラル・チーズの存在

地域経済学科3年 高橋映史
（苫小牧西高校出身）

事前学習で、十勝ブランドの認証商品であるナチュラル・チーズを、札幌のデパートで販売しているか調査した。ナチュラル・チーズを販売しているところは少なく、私自身もナチュラル・チーズの存在は、ゼミの場まで知らなかった。

チーズといえば、学校給食で出たスライスチーズの味しか知らなかったので、チーズ工房で代表の方に、チーズの商品を出していただき試食すると、それは衝撃的な味だった。それは、滑らかな舌触りで、コクがあり、独特の匂いで、一口食べただけで十分な味だった。お酒のおつまみで召し上がる人にとっては、誰にでも受け入れやすいチーズなのではないか。皆さんもぜひご賞味ください。

ナチュラル・チーズは、原材料の生乳を乳酸菌や酵素の働きで発酵させて固めたもので、個性的な味が楽しめる。熱処理を施して味を均一化「プロセスチーズ」と違い、加熱せずに熟成させ、菌や酵素が生きているので、デリケートな味わいになる。

十勝ブランドの掲げる「安心」・「安全」・「美味しい」の認証基準を満たした商品づくりの代表が、ナチュラル・チーズである。十勝ブランドは内発的発展を目指しており、地域の産品や地域自身の付加価値を高めようとするものだった。

3つの側面から見る 地域ブランド

地域経済学科3年 中村理恵子
（釧路北高校出身）

私たち西村ゼミは今回、「地域ブランドを考える」事を目的として地域研修へと向かいました。

「地域ブランド」とは、市町村という小さな範囲から支庁管内、北海道、日本などという様々な範囲の中で、それぞれの地域が特性を持ち、それを生かしていくという目的で出来たものです。これは、生産者と流通者、消費者の三者が納得できるものでなければなりません。

研修では、十勝管内で出された「十勝ブランド認証」という範囲の中で確立し始めているチーズに注目し、生産者であるチーズ工房、流通者である十勝財団からそれぞれお話をしていただき、それぞれの意見を知った中で「地域ブランド」を考える事が出来ました。それは、チーズ工房同士のつながりや工房独自の向上心の必要性、財団側が求める「安心・安全・美味しい」という信頼性の確保などです。つまり、地域の価値をどのような範囲で位置づけるか、どう知ってもらうか、維持していくかという事が重要なのです。

また、池田町のワイン城や中札内役場でもお話を伺い、様々な地域ブランドの捉え方を知る事ができました。

この現地研修では、範囲の捉えにくい「地域ブランド」を確立していく様々な方法を学べたと感じています。

研修を終えて、くつろぎの時間

12 古林 英一 ゼミ

■研修地:苫小牧市　■参加学生12名
■研修期間:05年10月20日～21日
■地域経済学科教授:古林 英一

今年度は、苫小牧漁業協同組合のご協力をいただき、サケ定置網の網おこし作業の体験をおこなった。北海道在住の学生諸君にとって秋サケは極めて身近な水産物であるが、これまで実際にサケの漁獲作業を間近に見た研修参加学生は1人もいない。百聞は一見にしかずとのことわざ通り、漁獲作業に参加することは貴重な経験となった。とはいうものの、ほとんどの学生が船酔いで作業に参加するどころでなかったが、これも貴重な経験であろう。

サケ定置漁業の体験実習

出港準備中

学生報告

船酔いはきつかったが

地域経済学科2年 和田祐弥
（とわの森三愛高校出身）

私達古林ゼミナールでは、地域研修で苫小牧市の漁業協同組合の協力のもと、苫小牧沖におけるサケ定置網漁業の体験実習を行いました。乗船は3人一組になり、とても寒い秋の海へと出港していきました。各船では、船酔いしてへばっていた人も元気に鮭定置網の網を引く手伝いをしている人もいました。船が止まった瞬間や網の中に入っているクラゲを見たときの気持ちの悪さはとてつもなく格別でした。実習が終わり陸地に帰ってきたときの安心感、そして何より海上での実習の過酷さをきつく教わりました。

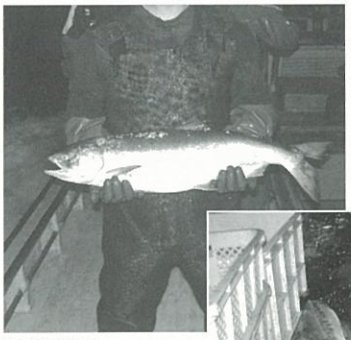
陸に上がり一息ついた後には、漁師さん達が捕れたての鮭から作られたイクラの醤油付けと鮭のちゃんちゃん焼きを私たちに食べさせてくれました。とても美味しくてよかったのですが、またこれがなんと船の上での食事となり私的ごとですが『陸で食べさせてくれよ～･･･』という感じもありつつも、やはり美味しかったです。古林先生は当日病院に行く予定で、一口も食べられなくとても残念で、かわいそうでした。

今回の実習は、みんなが初体験でめったに味わえない貴重な体験になりました。

イクラ丼と ちゃんちゃん焼き

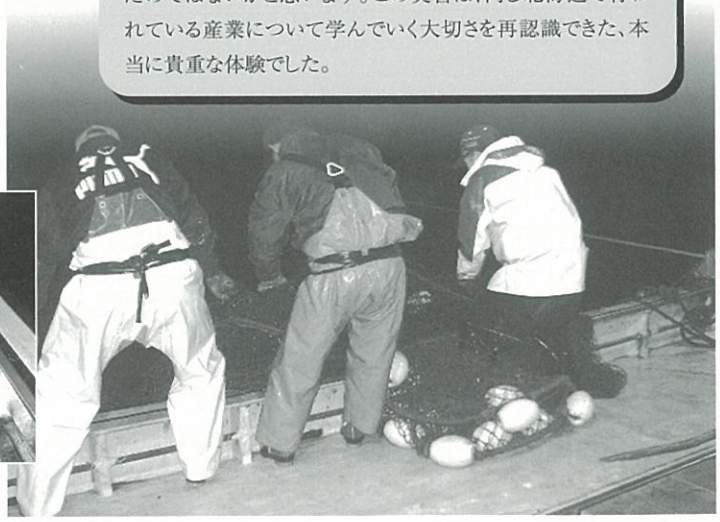
地域経済学科2年 川村祐輝
（北海道大麻高校出身）

私達古林ゼミナールIでは、地域研修で苫小牧漁業協同組合の協力を得て、苫小牧沖におけるサケ定置網漁業の体験実習を行いました。全員が、本格的な漁業初体験ということで、緊張の中、3隻の船に分かれて乗船し、実習がスタートしました。それぞれの船が受け持っている漁場に行き、網を引くお手伝いなどをする予定でしたが、8割の人が船酔いにやられてしまい、まともに漁に参加できたのはわずか2名でした。漁に参加できたメンバーは、網の仕組みや操作の仕方について教えてもらい実際にやらせてもらったり、今年話題になったエチゼンクラゲを踏み潰してばらばらにしたりと、他では味わえない貴重な体験が出来たものの、中にはほとんどの時間を船室で吐き気と闘いながら過ごして、全く作業に参加できなかった人もいました。漁から陸に戻ると、漁師さん達がとれたてのサケを料理してくれて、イクラ丼やちゃんちゃん焼きなどを食べさせてくれました。さらに、1人に1本ずつサケをお土産としてくれました。これで漁業実習は終わったのですが、結果として、作業に参加できなかった人もいましたが、作業に参加できた人も参加できなかった人も、今まで味わったことのない貴重な体験が出来たのではないかと思います。この実習は、同じ北海道で行われている産業について学んでいく大切さを再認識できた、本当に貴重な体験でした。



最高級魚鮭児

水揚されたサケ



網起し作業

13 水野邦彦 ゼミ

■研修地:韓国　■参加学生18名
■研修期間:05年8月31日〜9月7日
■地域経済学科教授:水野 邦彦

韓国社会を知る実地研修

韓国社会の形成過程と現代韓国人のなまの姿を知るために、研修では韓国の史蹟、とりわけ日本による侵掠の痕跡を訪ね、あわせて烏山(おさん)大学の学生たちと交流をはかった。事前に学んでいた歴史的事柄を学生みずから現地でまのあたりにし、衝撃を受けるとともに、〈知る〉ことの重みを痛感したようである。また学生たちは烏山大学生の家庭に3晩ほど泊めてもらったほか、この学生たちとほぼ1週間の行動をともにし、身をもって韓国的社会感覚を経験した。

景福宮

学生報告

民俗村での農楽公演

堤岩里資料館の前で

温かく迎えてくれた韓国の家庭

地域経済学科3年 大藤　進
(網走南ヶ丘高校出身)

異国でのホームステイは不安でしたが、私たちを迎えてくれたお母さんの笑顔は、不安を安心に変えてくれるほど印象的で忘れられないものでした。私は韓国の家庭料理をいちばん楽しみにしていたのですが、その期待は裏切られることなく充実していました。韓国人が客人にとても温かくふるまうという話は聞いていましたが、祝い事のためのワカメスープまでごちそうしてくれ、予想以上のもてなしを受けました。

韓国人はとても面倒見がよいのですが、日本人と感覚の違いを感じることもありました。日本人は個々人の時間を大切にしますが、韓国人は集団の時間をより大切にするようです。私たちが、ひとりで行動しようとしたり、日本人学生のあいだで何か計画すると、それを知った韓国の学生は、一緒に行ってあげたい、なぜ誘ってくれないの、と思ったそうです。

今回の研修は、たんなる見学でなく、韓国の学生との交流も目的としていました。じつは私はうまくコミュニケーションできるかどうか不安でしたが、そんな不安はお荷物なだけで、じっさいに接するなかで、なにかの共感が得られたときの喜びは、かけがえのない経験でした。異国の人とコミュニケーションする楽しさを体験できました。

大好きになった韓国

地域経済学科2年 笹嶋美央
(札幌手稲高校出身)

研修では日本による侵略の跡をいくつかたどりました。まず、朝鮮独立運動の先頭に立ってわずか16歳で獄死した柳寛順(ゆかんすん)の生家とお墓を見学しました。お墓に行くためにきつい山を登ったのですが、彼女のお墓の前で私もひとりの日本人として謝ることができてほんとうによかったと思っています。この研修がなければ一生果たせなかったと思います。つぎの独立記念館は、じつは入館するまではあまり興味がわかなかったのですが、いざ入ってみると展示物に見入ってしまって、みんなに置いてゆかれるほどでした。ここには朝鮮独立運動にたいして日本がおこなった弾圧や拷問などが鮮明に展示されていました。同行した韓国の学生に私は、あなたたちは日本人が嫌いにならないかと聞いてみました。すると、心苦しいけれどあなたたち日本人も昔の日本人がしたことを考えると心が痛むのだから同じことなんだ、という答えが返ってきました。この言葉を私は忘れません。

私がこの研修で得たいちばん大きなことは、韓国が大好きになったことです。それは、見学にくわえて同世代の韓国の学生と交流し、その学生たちがほんとうにやさしかったからです。

韓国は私たちが学ぼうとすれば受け入れてくれる国だと思います。いちばん大切なのは、相手の国を知ろうとすることです。

ホテルのフロントにゼミ生集合

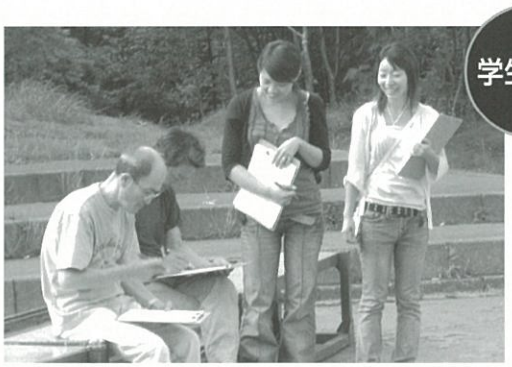
14 水野谷武志 ゼミ

■研修地:登別市　■参加学生15名
■研修期間:05年8月15日～18日
■地域経済学科講師:水野谷 武志

登別観光の実態調査

今年の地域研修のテーマは、観光客が登別温泉をどう評価しているか調べることでした。ゼミ生全員で作成した調査票を片手に登別温泉町の地獄谷周辺で観光客に聞取り調査する方法をとりました。見ず知らずの観光客に話しかけ調査協力をお願いするのはゼミ生にとって貴重な経験になりました。調査票を集計してみると、道外からの観光客が4割も占め、温泉に対する満足度が非常に高く、お土産に対する満足度が低いこと等がわかりました。

第一滝本館常務取締役の南信行さんの講演会を終えて



地獄谷を訪れる観光客に聞き取り調査する一場面

学生報告

濃いゼミ論文作成のために

地域経済学科2年 吉村智和
(小樽桜陽高等学校出身)

水野谷ゼミでは、12月に開催される全国ゼミナール大会に用いる論文作成のため、8月15～18日に、登別での現地調査を行いました。そもそもこのゼミ論文のメインテーマは、観光統計というものなので、観光客の方々に簡単なアンケートを答えてもらい、その実態を知る。ということと、自分たちで登別の3大テーマパーク(マリンパークニクス、熊牧場、伊達時代村)へ行き、それぞれのテーマパークの代表者の方々にお話を聞き、その現状を知るという目的で調査を行いました。

登別の温泉観光地を歩いている人に、無作為に声をかけアンケートに答えてもらうことは、調査前に僕たちが予想をしていたよりも、はるかに難しく、心身ともに多大なダメージを受けました…。ですが、その甲斐あってか、そのアンケートから得られた情報は、ゼミ論文の内容をより濃いものにしてくれました。

3大テーマパークへの訪問は、アンケート調査の翌日であったこともあり、僕たちの心を癒してくれました。(特に熊が。)ここでは話しきれませんが、現地調査では、教室での座談では知りえない、登別の現実を知ることができ、実りのある体験ができました。

苦戦を強いられた聞き取り調査

地域経済学科3年 宇田聖宣
(室蘭清水丘高等学校出身)

水野谷ゼミでは昨年の西興部村に続き、今年は登別での現地調査を3泊4日の日程で実施しました。主な内容は、温泉街の実態の把握とその将来に向けた一提言のためのアンケート調査でした。

今回の合宿のメインとなったのは、実際に登別温泉に訪問している観光客にA5版サイズ(両面)のアンケートに答えてもらい、それをもとに登別観光の実態を把握する、というものでした。予想通り、まったく見ず知らずの人に声を掛けて回答していただくということで、実際にはかなりの苦戦を強いられました。というのも、観光中の方々の足を一時的に止めなくてはならず、ご協力いただけないことが数多くあったからです。ゼミ生の中には断られた回数のほうが多かった、という声もありました。好天に恵まれ、絶好の調査日和(?)だった反面、このように精神的にもかなり辛かった調査でもありました。しかし、調査が終わって今振り返ってみると、実際に生の声を聞くということは普段あまり経験できないことであり、また、参考書や文献を読んで考えるということよりもはるかに説得力があるというか、納得できるというか、「これが実態なんだ」という知識と理解を得ることができ、とても貴重な時間でした。

聞き取り調査前日に地獄谷を下見して記念撮影

15 山田誠治 ゼミⅠ

■研修地：函館市　■参加学生17名
■研修期間：05年10月3日～4日
■地域経済学科教授：山田 誠治

人と人のつながりを拡げる中で函館駅前の活性化を

中心商店街の空洞化は今や全国的な現象になっていますが、それに対する取り組みも徐々に広がってきています。北海道有数の都市、函館もその例外ではなく、激しい変化の中で様々な人たちがいろいろな試みを追求しています。その現場の話を直接聞くことを目的にして、函館を訪ねました。有名な函館山からの夜景のように、もっと街を輝かせようという人たちとの出会いは、学生にとっても貴重な体験でした。

地域研修のなかまたち

学生報告

駅前商店街のアンケート調査を終えて（上）と「ひかりの屋台大門横町」のデザイン画（右）

「ひかりの屋台 大門横丁」ができるまで

地域経済学科3年 高橋聖依
（中標津高校出身）

私たちの地域研修は、函館駅前商店街の活性化について調査するというのが目的で、まず1日目には大門地区活性化のための「ひかりの屋台大門横丁」の建設現場を見学し、それを担当された「はこだてTMO」の池田さんの苦労話を聞くことができました。函館駅前をどのように活性化するのか、資金はどのように集めたのか、またどのように使うのが有効か、そして、どのようにすれば人々が街に戻ってくるのか、等の池田さんの熱い話が印象に残りました。

研修2日目には、商店主や通行人へのアンケート調査を行い、函館駅前商店街の街づくりについて、いろいろな角度から聞き取り調査をしました。なかなか話を聞かせてもらえず苦労もしましたが、こうした街づくりの現場に接することができたのは、私にとって貴重な経験となりました。

研修が終わって数週間後、この「ひかりの屋台大門横丁」の開業がメディアで報道され、とても賑わっている映像を目にしたとき、自分のことのようにうれしく思いました。細かいところまで気が配られ、たとえば、夜遅くまで街の人々が楽しめるように交通手段も遅くまで営業し、活気を取り戻すためいろいろ考慮がされているのに感心しました。

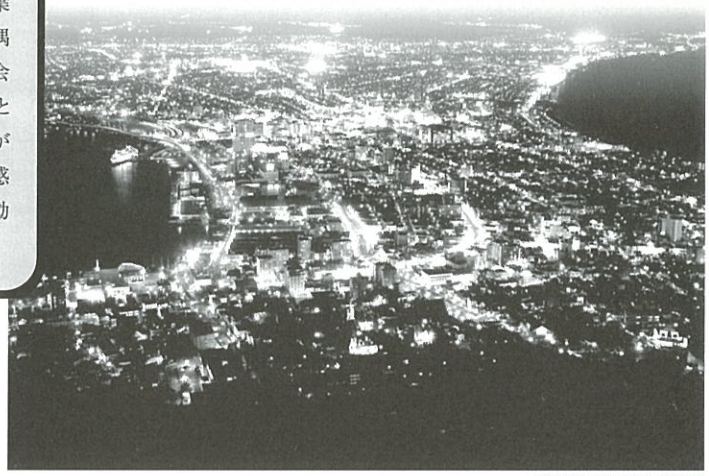
『親和力』を高めて街づくりのネットワークを

地域経済学科3年 高瀬理絵子
（岩見沢西高校出身）

私が印象に残ったのは、函館の中心街活性化の取り組みを調べる中で、多くの人の話を聞くことができたことで、そのうち特に心に残ったのが丸藤さんという方です。

丸藤さんは、普段を駅前商店街で美術商のお店を経営しながら、街の活性化のために多面的な活動をされ、ラジオのDJや大学講師などもされている函館の街づくりのリーダーの一人です。講義のように語りかける話の中身も濃いもので、「はこだてTMO」の活動の一つである大門祭りは、私たちと同じ大学生が中心となって始まり、年々拡大する中で大門地区の活性化につながっていった、というストーリーを聞いて、若者の力はすごい、と改めて思いました。

また、忘れられないのは、彼の言った『親和力』という言葉です。人と人のつながりや出会いは本当に重要なもので、偶然が重なり合って出会いがつくられる、だから、私たちが出会いたいと思っている人は、実は自分から何かをすれば、きっと出会えるのだ、というものです。振り返ってみると、今まで、私が出会ってきた多くに人々も、その『親和力』によるのだ、と実感でき、この不思議な人と人とのつながりの力が街づくりの原動力になっているのだ、と改めて教えられた体験でした。



美しい函館山からの夜景

16 山田誠治 ゼミⅡ

■研修地：金沢市・富山市　■参加学生11名
■研修期間：05年9月27日～29日
■地域経済学科教授：山田 誠治

北海道と本州の街との大きな違いの一つは、その歴史の長さです。金沢は、その歴史と伝統を基礎に新しさを求める街づくりを展開し、富山の路面電車を生かした街づくりも、ある意味古くからある交通手段を「再生」させる試みです。私たちが訪ねたこの二つの異質な街との出会いは、ゼミ生すべてが道内出身者ということもあり、貴重な経験だったと思います。…そして、みんなで食べた金沢の創作料理も、旨かった…。

伝統と未来の融合を追い求める街－金沢と富山

昔の街並みを保存したひがし茶屋街界隈

学生報告

日本三名園の一つ兼六園（上）と金沢城石川門（右）

21世紀のコンパクトシティー－金沢

地域経済学科4年 渡邉暁美
（札幌藻岩高校出身）

今回山田ゼミが訪ねた金沢市は、小京都と呼ばれているように、日本の伝統的な景観がそのままの形で残されている街です。現在でも地域住民が普通に生活している「長町武家屋敷」、時代劇によく見る光景の「ひがし茶屋街」、かつては加賀藩の本城としてそびえ立った「金沢城」、日本三名園の一つ「兼六園」、そのすべてが徒歩で歩ける範囲内に立地しています。そして、その伝統的な街並みを一歩はずれると、私たちを現代に引き戻す商店街やデパートなどの商業地域に抜け、街々の区分をはっきりさせながら、「保全と開発の調和」がとれているコンパクトシティー、これが私の見た「世界都市金沢」です。歴史・伝統・文化を生かし、独自に様々な条例を制定しながら、地域の特徴を生かした街づくりの模範というべき都市でしょう。そんな街を直接見て触れることにより、文献やインターネットでは得られないものを感じることができました。

生まれてから今までずっと札幌に暮らしてきた私にとって、観光目的以外で他の地域を訪ねる経験は、新しい発見であるとともに、自分が住んでいる地域を客観的に見直すよい機会となりました。地域について学習することとは、視野が広がることなのだ、ということを実感できた研修でした。

こだわりの路面電車で街づくり

地域経済学科4年 村上慎太郎
（札幌国際情報高校出身）

私たちは、金沢市とともに富山市を訪問しました。札幌でも存続が議論されている路面電車を生かした街づくりが、富山市では「富山ライトレール」計画として具体化されていたので、その構想を見るのが目的です。

この計画は、利用者減に悩むJR富山港線を第3セクター方式の路面電車に転換し、駅の増設、沿線の街づくりをきめ細かく展開し、各種のサービス・デザインも取り入れるというもので、様々な面で「こだわり」を追求していたのが注目できます。全低床式車両LRTを導入し、7色の色鮮やかな電車が、北陸新幹線開通時に高架化される富山駅の下を走り抜け、乗り継ぎも簡便化し、現在運行中の富山地方鉄道に接続させ、富山市南北の広い範囲で、使いやすく親しみのある電車が街中を走る、という計画です。

鉄道好きな私にとっては心躍るような話でした。新幹線開通による多くの観光客の来訪を前提としているなど、計画どおりいくのか不安も感じましたが、富山港線路面電車化推進室の笹岡さんは、色鮮やかな資料を用いて、分かりやすく計画を説明してくれ、私たちの質問にも丁寧に答えていただき、大変充実した時間となりました。私は、開業後もまた必ず富山市を訪ねよう、と思っています。

250年の歴史を誇る近江町市場にて

北海学園大学

経済学部［経済学科・地域経済学科］

●入試に関するお問い合せは●

入試部:TEL.（011）841-1161（内線2213）

http://www.hokkai-s-u.ac.jp